

## 〔書評〕

## 鈴木尉元著「新版 日本の地震」

本書は旧著（1975）の改訂版である。しかし、新しいデータに基づいて書き直されただけでなく、防災に関する章など新たに追加され、全くの新作と言ってよい。旧著の読者も一読をお勧めする。

中村左衛門太郎（1954）は地震学を物理地震学と地質地震学とに分けた。言うまでもなく、わが国の現状は前者のみ跋行的に発展していると言わざるをえない。その中で著者は後者を推し進める数少ない専門家のひとりとして第一線で活躍しておられる。

著者は従来の地震帯の概念にもう一度光をあて、その地質学的意味を力説している。地震帯は隆起単元の周辺部に存在する撓曲帯に当たるとした。そこは剪断歪が卓越し被害地震が多発する。また、異常震動帯でもある。浅発地震が上記のような地層の変形と密接に関連して発生してもおかしくない。構造地質家にとっても受け入れやすい議論である。しかし、深発地震がそうした隆起単元と関連しているとの説はいま一つ説得力に乏しい。最近震源決定の精度が良くなり、地表の構造単元との相関よりも深発地震面との関連がより見事に証明されるようになったからである。旧著にあったマントルに達する震源の投影断面図が姿を消しているのもそのためかも知れない。ブロックテクトニクスを主張するからにはこの点を明確に示してもらいたいものである。

本書の随所に戦前の古い文献が引用され、エピソードなども散りばめられている。徒らに流行を追うのではなく、古典まで遡って広く学習する著者の姿勢がうかがわれる。こうした学問に対する態度は若い人たちの範となるものである。

最後に地震被害の予知予測の重要性を指摘し、地震に強い町づくりを主張しておられるのは、防災を専門とする筆者にとって大変有難いと思った。（若松 暉）

## 〔学会情報〕

### 南京大学で大陸縁辺の地質に関するシンポジウム

最近、新潟大学植村 武氏のところに、上記シンポジウムの案内が参りましたので、お知らせいたします。内容・日程等は下記のとおりです。

- Aセッション：大陸縁辺の構造地質と地球物理（盆地の形成機構を含む）
- Bセッション：岩石学（火成活動，堆積作用，変成作用を含む）
- Cセッション：エネルギー資源，鉱物資源とそれらの分布の概則性
- Dセッション：他の関連分野（地震学，地質工学を含む）

日 付：1986年10月20日～11月2日  
その後，中国南京部海岸地域の巡検  
主 催：南京大学

事務局長：Prof Shi YANGSHEN, Director of Petroleum and Natural Gas Research Center, Nanjing University.

参加希望者は、1st Circular に挿みこまれた用紙に記入して、今年10月1日までに事務局長あて申し込んで下さい。1st Circular は、植村氏あるいは構造研事務局にあります。